

おあしす



特定医療法人 南山会

親切 安心 信頼

峡西病院・峡西老人保健センター・きづな
・アルプス訪問看護ステーション

2017 9

第31巻9号
(通巻361号)

「おあしす」創刊 30周年記念号!



桃畑の一角に堂々と鎮座する丸い石は山梨が誇る石神さま、道祖神である。道祖神は村の境界や道の辻などに祀られる路傍の神で村の守り神、子孫繁栄、近世では旅や交通安全の神として信仰されてきた。普通は石碑や石像の形をとるが、山梨ではなぜか丸い石を祀ったものが多い。写真の丸石道祖神は山梨市七日市場のバス停前で見つけたものだが、私の知る限り山梨で一番大きく玉の形も整っている。大きな石の周囲にある小さな丸石は、大きな丸石が生んだ「ボコ」である。これは石の中から小石が産まれる「子生石（こうみいし）」の信仰が習合したものであろう。この石に願をかけ、子授けの靈験にあずかった人々は、お礼参りに丸石を一つ奉納しなければならないとされている。丸石道祖神は当院のある南アルプス市にもたくさんある。玉であり魂である道祖神を決しておろそかにしてはならない。



峡西病院の理念

「その人らしさ100%」

峡西病院の方針

1
説明と納得の
医療

2
多職種の連携

3
「こころよさ」の追求

4
社会参加の推進



「おあしす」 30周年!!



1987年9月5日に創刊された「おあしす」は今月で30周年を迎えました。

寄せられたコメントを過去の「おあしす」に掲載された懐かしい写真とともに紹介します。

開かれた医療を目指して

南山会 理事長 川崎 光洋

「おあしす」が発刊されてから30年がたった。30年前の昭和62年という年は日本の精神科医療にとってエポックメイキングな年であった。この年、宇都宮病院事件（看護職員による暴行で入院患者2名が死亡）などの反省から、精神障害者の人権擁護、社会復帰の促進を謳った精神保健法（平成7年の大改正により精神保健及び精神障害者福祉に関する法律に改名）が成立したのだ。

「おあしす」の発刊の背景には精神保健法の主旨を具現化し、精神科医療の閉鎖性を打破し、社会に開かれた医療を目指したいという強い願いがある。私たちは「社会に開かれた精神科医療」を目指した。私たちが何を考え、何をしているのか、世間の人たちが入院患者さんのご家族に知ってもらいたかった。精神科病院は、「鉄格子のなかで狂気が渦巻く恐ろしい世界」だという世間の偏見を払しょくしたかった。

患者さんたちの日常をレポートすること、面会に來れない家族との距離を少しでも縮めたいと思った。紙面を通じて入院患者さんたちの背中を押して社会復帰へ勇気を持って踏み出すことを促した。

病院での出来事をオープンに

1991年8月
通巻48号
「わが家の
これが一番」



すること、職員は患者さんに対する人権への配慮をより一層強く意識せざるを得なかった。専門分化した職員間の意見交換の場やお互いを知る交流の場ともなった。

「おあしす」は私たちの旗印である。そこに掲げた私たちの理念は、さまざまな実践を通じて具体化されなければならぬ。『実践なき理論は空虚だが、理論なき実践は暴挙である』と大哲学者カントは言う。矛盾多き厚労省の医療政策や診療報酬体系という現実には依拠しながら、掲げた理念を諦めず具現化していくことは、危うい綱渡りのようなものであった。

しかし、苦しみながらも質の高い医療体制を通じた入院期間の短縮、外来機能の充実、社会復帰施設の設置など30年間休むことなく様々な努力を着実に重ねてきた。

その結果、入院患者は30年前の三分の一になり、外来患者数は四倍になった。いま「おあしす」を開けば30年間の軌跡が鮮やかによみがえって来る。「おあしす」を通じて峡西病院は確実に自己変革を遂げたのである。

「30年物」

峡西病院 院長 浅川 理

法人広報誌「月刊おあしす」が9月5日で創刊30周年を迎えた。職員の手作りでモノクロ印刷から始まった小誌が、今は虹色、法人ロゴマークだけでなく日本医療機能評価機構の認証マーク入りである。ここまで立派にしてくれた編集スタッフと関係諸施設の方々に感謝したい▼30年とはどのくらいの重みがあるのだろうか。長雨の夏休みに自宅にある30年物を探してみたが、フォトアルバムや音楽CDなどは当然残されているものの、現役日用品では鉄製のコーヒーマル、アラジンの石油ストーブ以外ほとんどなかったのだ。「30年物」でネット検索してみると、スコッチウイスキー有名銘柄がどさどさ出てくる。職人が情熱を傾け、手塩にかけてじっくりと時間をかけて作り上げたものばかりで、いずれもそれなりの値段だ。何にせよ愛着が育つまでになるのは大変なことなのだ▼ただ原稿締め切りの直前にひよっこり出てきたものもあった。めっきり聞かなくなっていたアナログレコードで、ピアノ界の巨人リヒテルの「バッハ平均律クラヴィア」だった。それは30年前の夏、父を送った後茫然としていた時に繰り返し聞いたものだった。再生してみると自然に当時の記憶が蘇って、沁みだ▼極めて個人的な話だが、昭和62年の盆前は、精神病院

1997年5月
通巻117号
新入社員
集合写真



の実習中であつた。大学6年で、卒後の道をいよいよ真剣に考えなければならぬ時期であつた。「精神科に行くのだから」と、他人事のようにぼんやりとしたものは「感じて」いたのだが、決定打がなかった。実習で嫌気がさす理由でも見つければそれも一つなどと考えていたのかもしれない。実際には嫌にはならなかったが、どつと疲れてしまった。実習が終わり、病床にあつた父にそのままを話したら、喘鳴しつつ「精神科はこれから大事だぞ。」と言ってくれた。後押ししてくれたのだろ。8月17日父は逝つた。原稿依頼が、個人史を振り返るひと時を与えてくれたというわけだ▼あと30年もするとAが人間の仕事の多くにとつてかわるという。医療現場も例外ではないし、「精神」とか「こころ」とかも脳科学だから、Aが最適な治療を提示できれば、精神科医不要となるかもしれない。でもその時でも、この「おあしす」編集にはAではなく、音楽でも酒でも、「深く五臓六腑に沁みわたる」感覚が共有できる「人」であつてほしいと思う。これからも「おあしす」は、田舎の地酒のような味わいを醸し出してくれることを願う。

一昔二昔三昔…

初代編集長のつづやき

小松 寛志

三十周年と知って表題のように書いてみた。慎ましかなタワー、あるいはピラミッドに見えるのは

僕だけだろうか。旧中巨摩郡神村出身の内藤多仲は東京タワーの設計者で「積み重ね 積み重ねてもまた積み重ね」という含蓄に富む言葉を残した。

さて、川崎理事長から新聞発行の目的を聞いて、僕は峡西病院（患者さんと職員）と家族（地域に暮らす人々）とをつなぐ新聞と捉えて、名称を「おあしす」と決定した。また、キャッチコピーを「やすらぎ・うるおい・ネットワーク」とした。

新聞一面上部の題字は視覚的効果を考えて、友人のデザイナーにウイスキー一本の謝礼でレタリングを依頼した。僕自身は高校時代から仲間と文芸系のミニコミを発行（手書きやタイプ・謄写版やオフセット印刷）していたが、自己流であった。そこで、編集委員と知人の某雑誌編集者の旧竜王町のご自宅まで伺って、編集制作のノウハウを教わった。こうして「おあしす」は船出。幾星霜を経てデジタル化が進み編集デスクはすっかり様変わりし、あの題字レタリングも今はもう使用されていない。創刊号からワープロ導入までの期間は、割り付け用紙上で紙面レイアウトを行い、出来上がった版

下をオフセット印刷にかけるという工程だった。僕は創刊号から最新号までの「おあしす」を保存している。当時のハンドメイドによる切り貼り作業で生まれた版下を手にとると、これも最先端の技術・職人技だったと懐かしく思う。

創刊号の一面の病院全景写真は笹本医院の屋上から撮影した。魅力的な紙面を目指して写真やカット、飾り罫を用いて工夫した。表紙には必ず写真を用いたが、病院行事のスナップはもちろん季節感あふれるショットを求めて地域を取材し、桃園の枯露柿のカーテンや下市の獅子舞などは話題を呼んだ。

「おあしす」は医療福祉等の関係者や団体にも配布していたが、当院の医療活動に関心を抱いた医学書院の「看護学雑誌」と日本評論社の「こころの科学」編集長が病院見学に来た。また、小笠原保健所管内看護協会地区支部が会報を創刊する際に「おあしす」編集室が協力……ああ、濃密な時を想起した。

幾多の変遷を経て紙面はカラーとなり、コラムも変わったが、創刊の編集方針は堅持され、一号も欠かさず月刊が維持されている点は驚嘆に値する。

1998年9月
通巻133号
「懐かしのひとこま」



「おあしす三十周年」という事を知り、何と時の経つのは早いのだろうと驚いています。私が就職したのは広報「おあしす」が創刊される数年前であったので……という年もばれてしまいましたが、少し懐かしくその当時のことを振り返ってみたいと思います。

私は高校卒業後、峡西病院に就職しながら看護学校に午後から通わせてもらっていました。その頃は私以外にも毎年のように看護学生を育てて頂きました。病院の建物は今の楽山館の前の職員駐車場、場所に男子・女子の閉鎖病棟があり、開放病棟は有朋館前の駐車場の場所になりました。当時の病棟の病室は6人ぐらゐの大部屋で畳部屋でした。鉄格子もあり、今の病棟とはかなりかけ離れたイメージのものでした。

しかし今振り返ると楽しい思い出がいっぱいです。山梨県精神病院協会のスポーツレクリエーション大会では、ソフトボール大会やバレーボール大会があり、大会前には職員も負けるものかと力が入り、今のリストアート・老健の建物の場所にあったグラウンドで朝から患者さんたちと練習している姿もありました。夏祭りにはグラウンドに櫓をつくり太鼓演奏をしたり、浴衣姿の職員や近所の住民の方達も一緒に盆踊りを楽しんだりしました。運動会では職員競技もあり、大笑いした思い出が次々思い出されます。クリスマス会でも病棟ごとに疾患共に出し物で競いあったりしました。あるとき当時の病棟師長が急に「つば採り

に行くぞ」と患者さんを連れ出し必死で田んぼでつばを採った事も楽しい思い出です。今ではちよつと考えられない様な風景ですが、私は先輩達から患者さんとの関わりの重要性を体験として教えて頂きました。

三十年の月日は就職当時の若かりし私もすっかり変えてしまいましたが、峡西病院も南山会となり、大きく変わりました。認知症病棟や、精神障害者社会復帰施設、老人保健施設、峡西病院の新病棟建設、病院機能評価認定、訪問看護ステーション開設等様々変化してきました。今は電子カルテ化に向けて職員が奮闘しています。当時の事を語れる職員も減ってきましたが、今後も時代と共に変化していく南山会を是非応援して下さい。

他の病院職員等からも「おあしす」見てますよと声を掛けられることも多いです。仕事の合間を縫い「おあしす」の編集にこれまで携わってきた広報委員会の職員に感謝いたします。

峡西病院看護グループマネージャー

渡邊 由生美

1996年12月
通巻112号
表紙



おあしす30年の歴史

病院の活動や状況を患者さんやご家族や地域の皆さんに知ってもらおうと創刊され早や30年。
おあしすの30年を南山会の歴史とともに振り返ってみました。

～創刊した当時の南山会のようす～



1987年
『夏祭り納涼盆踊り大会』



1990年9月通巻37号
グラウンドがなくなったため中庭で盆踊り。



1989年6月 通巻22号
『精神病院協会球技大会』



1990年11月通巻39号

患者さんから院外で競技をしたいとの意見が強く、初めての試みとして甲西町民総合グラウンドにて運動会が行われました。各病棟から200余名の方と家族が参加。900個のおにぎり・豚汁が用意されました。



1987年『秋季大運動会』
職患対抗綱引き



1988年11月通巻15号
運動会では模擬店も彩りを加えました。



1989年11月 通巻27号
病棟増築によりグラウンドがなくなったため、運動会に替わって屋内で『秋祭り』が行われました。

毎日新聞におあしす100号の記事が掲載されました。



1993年

峡西老人保健センター開設
精神科デイケア「フレンズ」開設

1995年

★おあしす
100号！

1997年

精神障害者地域生活支援センター
「さがる館」開設

★2004年

おあしす
200号！



2008年

現病棟「楽山館」完成



2009年

おあしすがカラー印刷に！
表紙は当法人川崎理事長
撮影の写真が定番に。

30年！ビフォー&アフター

創刊号に新人紹介
で掲載されている
矢崎安訓看護師



現在も当院クレル病棟で勤務しています！

おあしす共々、30年間
ありがとうございます。
これからも、30年前の
体重で頑張っていこうと
おもいます。



2017年9月

おあしす30周年！

祝



2012年

おあしす
300号！



2015年8月

「アルプス訪問看護ステーション」開設

ろうけん Times★

最近では雨の日が続き、気温も30度前後で涼しい日もあります。7月に行われたそうめん大会、皆夢中でいっぱい食べました。老健前の外に出でそうめんを流し、いい思い出になりました。



ディケア Channel

チャンネル



今月のディケア活動紹介

プログラム名 S S T

活動日 隔週金曜日

活動内容

S S Tは、「社会生活技能訓練」と呼ばれる心理社会療法の一つです。精神科におけるリハビリでよく行われているものですが、当院では、対人関係技能に注目し、「人付き合いを今よりもっと上手になること」を目的に行っています。たとえば、自分の気持ちをうまく伝えることや相手の気持ちを考えた表現方法などを練習しています。練習内容は参加者で相談して決めます。ダメ出しではなく、良い所を見つけていくことを大切にしながら活動するところが特長です。

〈練習例〉

無理なお願いをされた時に相手の機嫌を損ねることなく上手に断る。相手に事情を知ってもらい自分への理解を求める。相手からの誘いをうまくかわす。…



新入社員紹介



松澤 喜世美
看護師
(C病棟)

◆趣味…コンサート
◆好きな食べ物…寿司
◆好きな有名人…嵐、バックナンバー

患者の権利と義務

あなたには、「その人らしさ100%」の理念の下、闘病の主体者として、以下の権利と義務があります。

1. 必要かつ十分な医療サービスをあなたにふさわしいやり方で受ける権利
2. 闘病の主体者として、医療者と協力して治療に参加する義務
3. 病名・病状・予後・診療計画・薬の名前や副作用などについて説明を受ける権利
4. 個人の秘密が守られる権利と、私的なことに干渉されない権利
5. 患者としての行動に適用される病院の規定・規則を知る権利とそれを守る義務
6. 医療費等の請求を点検し、説明を受ける権利と、それを期限までに支払う義務
7. 他の患者や病院職員の医療提供に支障を与えないよう配慮する責任
8. 治療上必要最小限の行動制限を受けることがあるが、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」に定められた面会・通信の自由・退院請求の権利及び治療・対応に対する不服申し立てをする権利

平成28年度
目標管理発表会

最優秀賞
精神科デイケア
八木澤 ひかり

設定した目標

新規プログラム「就労ツアー」を立ち上げ、利用者の就労の選択肢の拡大を目指す

目的

「4つのきっかけ作り」

①働く場や人と顔見知りになり、不安やハードルを減らすきっかけ②仕事の選択肢を増やし、自分に合った仕事、興味のある仕事を見つける、考えるきっかけ③具体的な仕事へのイメージを持ち、自分の目標を意識するきっかけ④実際に働く目線で必要な情報を発信し、仕事についている人々が知るきっかけ

スタッフもきっかけ作り

①就労事業所、企業とつながるきっかけ②メンバーの新たな一面を知ること

実施

メンバーより希望を聞きながら見学先を決定。2〜3か月に1回の実施にて、できるだけ多くの方が参加できるよう、曜日を決めず、登録曜日以外のメンバーの参加も可能とした。

見学に行く際には、見学先の情報をメモできる記録用紙を、見学後は個人的な印象や評価を率直に記入してもらい振り返り用紙を配布し、参加者に見学した感想を書きとめてもらった。

見学先の基本情報やパンフレット、参加者の口コミなどをまとめた「就労ツアーガイドブック」の作成を行った。デイケア内の就労揭示コーナーに置き、メンバーが手に取って見られる形にした。

結果

今年度はB型就労事業所2か所の見学を実施することができた。参加者の中には、利用したいと直接事業所へ連絡を取った方もいた。

20代〜60代と幅広い年齢層が参加していた。
普段就労について話題に出ないメンバーも参加していた。

就労への関心が高まり他事業所への見学が増加した。
一人だと踏み出せなかった方が、他のメンバーと一緒にあることにより参加することができた。

今後に向けて

一般企業への見学も実施できるよう、就労支援機関などと連携を図りながら実施を目指していく。また、見学に参加したメンバーが実際に就労へと結びつけるよう、個別支援もより重要視して行いたい。

就労ツアーガイドブックについては、まだメンバー間の活用度が低い、内容や揭示方法を再検討していきたい。

これからもメンバー一人ひとりが抱く、就労に向けた不安を減らし、自分らしい夢や目標へのスタートを切るきっかけとなることを目指して、就労ツアーの活動を継続し発展していきたいと思う。

新プログラム
「就労ツアー」
オリエンテーション
日時：平成28年9月26〜30日

- このプログラムでは、実際に仕事の場を見学し、自分にあった仕事探しや、就労へ一歩踏み出すきっかけづくりを目的としています。
- 参加者と一緒に見学先を決定し、就労支援A型、B型、一般企業といった様々な、「働く場」を実際に見学してまいります。
- 将来就労を考えている方、就労に対して不安がある方、実際にどんな仕事があるか興味のある方、色んな方の参加をお待ちしています。

◎不明な点はスタッフ八木澤まで問い合わせください。

こしらひ編集室

30年前の1987年(昭和62年)9月、「おあしす」は創刊されました。閉鎖的だと言われる精神科病院を開かれたものにするために、また患者さんやそのご家族、地域との絆をつくるために、発行され続けて今号でなんと通巻361号を迎えます。毎月1号8ページ、プロに依頼するのではなく職員が手作りする広報誌は決して多くないと思います。

「おあしす」の30年は、精神科医療や障害者福祉の歴史とともに紡がれてきました。今回30周年記念号を編集するにあたりバックナンバーを読み直したところ、歴代の編集委員の先輩方が、その時代に求められる情報は何か、常に悩み考え発信し続けてきたことを知りました。30年間受け継がれてきたバトンを今私たちが持つているのだと、身の引き締まる思いがします。私は17代目の編集長になりますが、任を受け継いでまだ半年。7名の編集委員に支えられ、拙いながらもなんとか今号を発行できました。

こうして「おあしす」が無事30周年を迎えられたのも、執筆や取材に協力してくださる方々や、発行にお力添えくださる山扇印刷さんやアルプスファームさん、そして何より読者の皆様のご理解とご支援があつたのことに感じています。改めて心よりお礼申し上げます。今後とも「おあしす」をあたたく見守っていただきたいと思います。

広報委員会 委員長 齋藤 由布

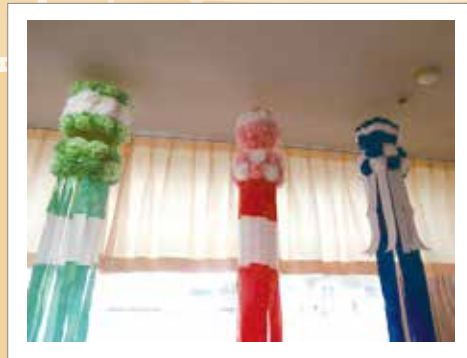
今月の予定

9月

- 20日 認知症疾患医療センター
準備委員会
- 21日 広報委員会
- 25日 治療プログラム委員会
クリニカルパス委員会
- 26日 地域医療会議



今月の1枚



峡西老健2階にある作品で作業療法士の学生が作ってくれた置き土産。多くの利用者が参加して作られた大作です。7月の七夕飾りで、利用者の身長より大きいのです。時間がありましたらぜひ見学に来て下さい。

おあしす広場

今月もおあしすに素敵な作品が寄せられました。

友だちは 風呂に入りてや 敗戦日
今福 和人

不眠症 早く目覚めて 深夜のラジオ
聴いていては夜(いつもの日の事)
大森 真知子

旅行での 思い出写真
鮮やかに エアパークでの
ブルーインパルス
恵風

高校野球 まけてくやしい 涙あめ
河野 かほる

遠花火音聞こえても人見えず
阪本 みずほ

打ち上がり夜空を焦がす花火かな
塚原 光明

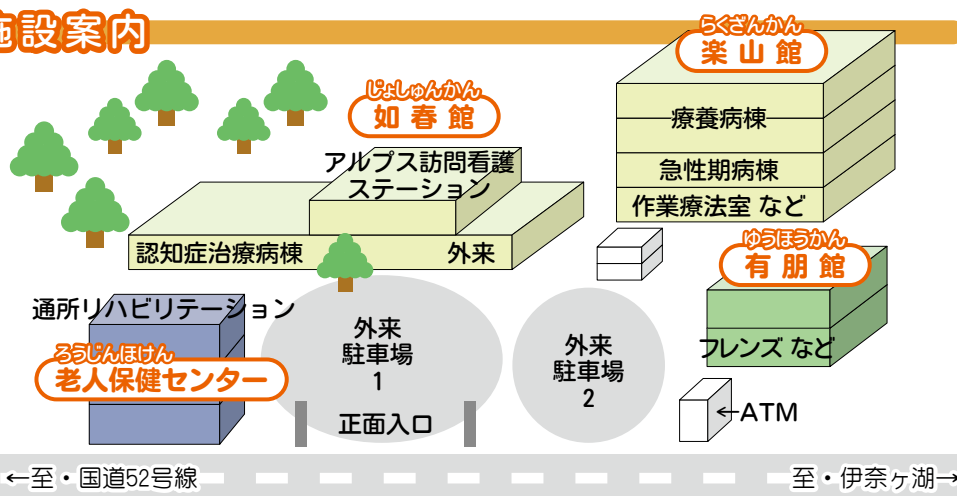
花火待つ事なしに過ぐこの数年
忍冬

9月なり 暑さも過ぎゆく もう秋か
渡辺 暁

たくさんのかどくを
たくさんさんの愛に
かえて
生きて みよう
渡辺奈美子

※掲載は五十音順です。

施設案内



交通案内

- JR中央線
甲府駅より車で40分
- JR身延線
東花輪駅より車で15分
- 中央高速
甲府昭和ICより車で30分
- 中部横断道
南アルプスICより車で5分
- 山交バス
甲府-南アルプス市甲西支所行き
(十五所経由) 鰍沢営業所行き
(西野経由) 鰍沢営業所行き
小笠原下仲町バス停徒歩5分

月刊おあしす第361号 1987/9/5創刊

発行所 〒400-0405 山梨県南アルプス市下宮地421
TEL 055-282-2151 FAX 055-284-4886
URL <http://www.nan-zan.or.jp>

特定医療法人 南山会

* 広報委員会 *

若杉 雄司、齋藤 由布、坂本 幸廣、近藤 忠彦
楚村 麻美、佐藤和加子、高根 綾、櫻井 千恵

次回362号も
お楽しみに!

印刷：株式会社 山扇印刷